

萱

2019・9

風萱集

木村 嘉男

くわくこうや風はあしたの日を散らし
凌霄花^{のうぜん}へ乱雲くわつと照り返す
息みだれやうやう槍ヶ岳^やを望みけり
大槍と小槍や花のちんぐるま
山旅のつひの夜ふけの稻びかり

亀田虎童子

誕生日玉虫いろの夜明かな
夏負けの読書いつしか上の空
後腐れなく逝きたしや西瓜割る
いぼむしり斧をかざして生れくる
飼猫に死なれて長き端居かな

小島 良子

指貫の皮の匂ひや芙美子の忌
梅雨寒や藍の色濃き伊勢木綿
草刈機停め老人に戻りけり
桜桃忌背免れをやや倒しけり
虫ピンは真直ぐに刺す八月来

松下 道臣

満開のさくらの下で息止めて
はにかむと爪を噛む癖さくら餅
リハビリの腕で拭ふ春の汗
夕めしはきのふのカレー荷風の忌
春惜しむガードレールに腰かけて

出牛 進

鳴き止みてそれとは知れりほととぎす
草丈を抜けてほつほつねじれ花
どくだみは好みの匂ひむしりたる
梅雨空よショパンのやうな雨だれを
朝は金と言はれしこともメロン食ふ

萱集

進選

幾年や無人の家の花薔薇
朝ぼらけ遠く二声閑古鳥
梅雨寒や手足の冷えは父譲り
音立てて樋を飛び散るさみだるる
宙吊りの土俵を潜る茅の輪かな
二日酔ひ朝寝して待つ梅雨晴間
日輪の追ひかけてくる夏野かな
蜘蛛あみを動かし森の闇動く
屋上に白南風あびて背伸びかな
金蠅や故郷去らぬ友かまし
東京 野村 宏

百歳の吾に会ひたる昼寝覚
絨毯の素足にやさし侯爵邸
調度にも明治の香りえごの花
梅雨寒や振り子時計の動かざる
梅雨未だ明けず蛇紋の大理石
東京 加倉井たけ子

七夕やインコさまよふゆふまぐれ
施餓鬼会や雨の唱和の深みゆく
夏蝶や悲田院跡にバスを待つ
蜘蛛の糸間もなく閉まる表門
梅雨寒の朝一番をででつぼう
埼玉 鈴木 愛子

紗をかけて夕焼残る八ヶ岳
雲の峰伏して齧む牛の群
森を揉む風音のなか初郭公
薄玻璃のグラスに注ぐ山夕焼
梅雨晴間昭和の廊下清拭きす
東京 武田 未有

夏蕨卒寿の秋田美人かな
手作りの灯籠競ふ子の夏越
大魚呑む青鷺の首ぐぐいと
夏の園若鷹三羽揃ひけり
父忌日精進揚とさくらんぼ
東京 飯塚トシ子

古き家の高き縁側海南風
夏の月灯りを消してノクターン
空蟬の命の殻を愛しめり
寡婦を生き気強くなりし髪洗ふ
(浅草ほづき市)
大寺の欄干に聞く江戸風鈴
千葉 中山 恵子